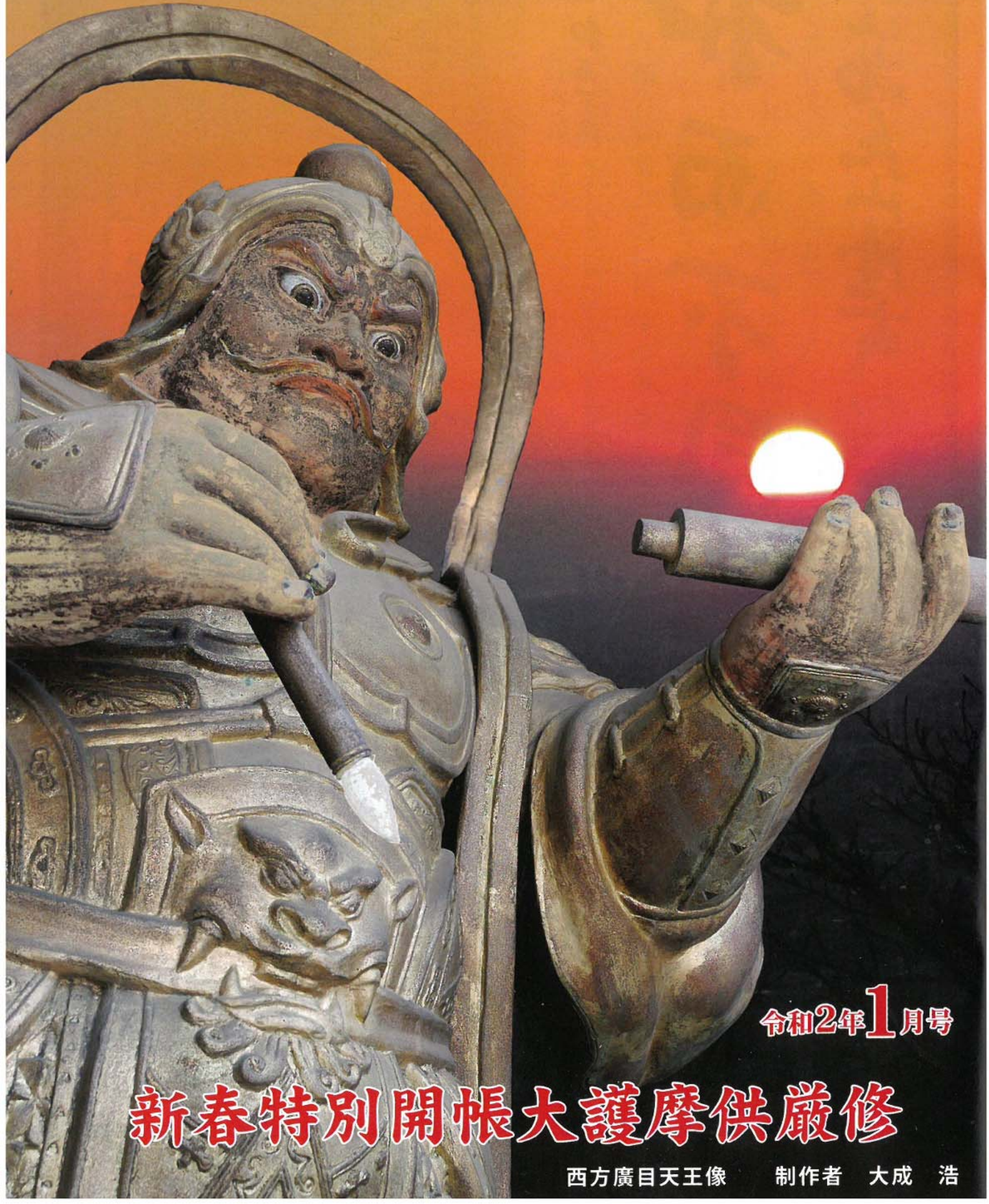


# 高尾山報



令和2年1月号

## 新春特別開帳大護摩供嚴修

西方廣目天王像

制作者 大成 浩

年頭所感

# 正しい心を見つめる

貫首 大山隆玄

明けましておめでとつございます。

御信徒の皆様方には、愈々御多祥の新春をお迎えなされた事と謹んでお慶び申し上げます。

山上の境内より仰ぐ御来光を拝し、その厳かな光と温もりに触れると、自ずと胸の前で手が合わさり頭を垂れてまいります。

刻一刻と移ろう大自然の営みは、私達

人類に生活への潤いと勇気さえ与えてくれます。大自然の大きい恵みに感謝して、幸せを感じるこそ、お大師様が「本当の財産は心の中にある」と言われた通り、大切にしなければならぬと思うのであります。

さて旧年を顧みまするに、新たに迎えました令和の時代も決して安穩とは申せぬ幕開けとなりました。多くの難題を抱える世情の混乱と共に、各地で起こりました自然災害の数々。高尾山におきましても台風十五号では暴風による倒木、十九号では山内各所で土砂崩れがおき、これまでに経験した事のない雨量により山麓の河川が氾濫し、山麓の商店街や駅周辺では土砂の流出や浸水な



和而不同

仲良くすることは大切だが、人の意見に流されない

# 和而不同

高尾山隆玄



ど深刻な被害を蒙りました。幸い周辺では人的被害は免れたものの、全国各地では多くの尊い生命が失われてしまいました。犠牲となられた方々のご冥福と共に、災害に見舞われた方々のご冥福と共に、立ち直りを、心より念じるものであります。いかに人類の繁栄と共に科学が進歩しようとも、大自然の絶大なる力の前には到底及ばず、先人達はとくにそれを承知して

素直に謙虚に自然に従うと誓った事が、あらゆる宗教を生む根本であろうかと思うのであります。私達も両親を縁としてこの世に人として生をうけた事自体有り難く、自分自身という生命も大自然の分身であると申せます。従いまして大自然を拜むとは、その分身である自分自身をみつめる事であり、迷いも悟りも自分の心のありよう一つではないでしょうか。ならば信仰とは正しい心を見つめる修練にほかならぬ事と思われまます。

十方有縁の御信徒の皆様におかれましては、常に変わらざる高尾山の御本尊・飯縄大権現様の御加護の下に信心を深めつつ、ご精進なされまして、この新しい年も益々輝かしくお健やかに過ごして頂きます様、心より御祈念申し上げます。

合掌

令和二年 庚子 元旦



至心に祈る大山御貫首

# 法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(91)

冬ながら  
空より花の  
散りくるは  
雲のあなたは  
春にやあるらむ

（古今集 清原深養父）  
（冬なのに空から花が散ってくる。そうすると雲の向こうは、もう春なのだろうか）

「雪花」には、冬と春との両方を含んでいるような新しい彩りが感じられたのでしようか。まさに季節を先取りする感覚です。

鶴亀も  
千年の後は  
知らなくに  
飽かぬ心に  
任せはててむ

（古今集 在原滋春）

（鶴や亀でさえ、千年後のことは知ってはいない。あなたの寿命に関しては、どんなに長くても飽き足らない私の気持ちのままに……どうか長生きをさせてほしい）

年齢の数え方の一つに数え年があります。生まれた年を一歳として、新年のたびに増えていきます。年齢を重ねることは喜ばしく、永久に続いてほしいと願いながらも、

それがいつ限りを迎えるのかは誰にも分かりません。「鶴は千年、亀は万年」と言われる長寿でめでたい鶴や亀でさえ、明日の命は知るよしもないのです。

月日は足踏みすることなく流れゆきます。おそらく今年も、気づけば三ヶ月が経ち、半年が過ぎたというように、時はあつという間に押し移るでしょう。

「電光石火」「電光朝露」という言葉があります。電光は「稲光」、石火は「石を打って出す火」、朝露は「早朝に草葉などに置く露」を表し、これらは全てが「極めて短い時間」を喻えています。さらにそこから派生して「人間の生死は速やかで何事にも空しいこと」を意味するようになりました。

人生が「電光石火」のように儚いことは、次のような逸話にも語り継がれています。高野山に滝口入道とい



初詣の高尾山に舞う雪の花

う聖（高徳の僧）がいました。もとは斎藤時頼という侍でした。時に、建礼門院（一一五五―一二二二）の雑仕（下級の女官）に「横笛」という名の女性がいきました。滝口（斎藤時頼）は横笛を愛していましたが、父はこれを伝え聞くと「身分の低い者に心を寄せるとは何事か」と強く忠告しました。

すると滝口は父に向かって、「西王母（中国の不老長寿の女神）も東方朔（西王母の桃を食べて長寿を得たという文人）も、名前が残るだけで今はいません。老少不定（人の命は定まりないこと）は、ただ石火（極めて僅かの時間）の光のようなものです。たとえ長寿を保つても、七十、八十歳を越えることはありません。しかも、その中でも身体が元気に動くのは、たった二十年余りに過ぎません。夢幻のような儚い世の中で、恋しい者と連れ添えば父の命令に背くことになりません。この苦難は

## 折り折りの記 (125)

波多野 重雄

### 高尾山の琵琶瀧蛇瀧初飛沫

昨年の台風十九号は高尾山を直撃し、蛇瀧の飛沫に変化が見られたが、現在は元通り回復した。あれ程の強風なので倒木もあり、木の葉の損傷そして紅葉には影響があったものの、今一つという程度で錦秋を飾った。

昔から「鱗雲が来ると台風が来る」と言う諺がある。十九号来襲の数日前早朝私は、高尾山上空を始め全市見事な鱗雲が隈なく覆っているのを見た。新春、蛇瀧路に初飛沫を浴び、高尾山薬王院に初詣の帰り道、琵琶瀧路に瀧の轟音が傾し、近付けば滝壺近くまで飛沫が舞上がっていた。（高尾山健康登山の会会長）

### 除夜兩人登山

厚木市 荒井 一雄

良縁成就祈禱焉

真言唱和御宝前

愛染明王大歡喜

善男善女迎新年

それぞれの  
思いあらたにのぼらん  
白き息はき鐘まきながら

除夜、兩人（カップル）は登山す

『良縁成就』を祈禱す…

御真言を唱和す、御宝前にて…

愛染明王様は大いに喜ばれ、

善男善女は新年を迎ふ…

きつと善知識（仏道に入る良い機縁）なのでしよう。いつその憂き世（生きるのが苦しい世）を避けて、真の仏道に入ることになっていたとします」と言うのと、十九歳の年に出家をし、その後はひたすら修行に励んだのでした。

（『平家物語』「横笛」）

滝口入道は、横笛への愛と父への恩との間で悩みました。父親に語った出家への思いは、さんざん苦しみ抜いた末に絞り出した決断だったのでしよう。恩愛の絆を断ち切ることが、父も横笛も裏切ることのない唯一の答えだったのです。

後に横笛も出家し尼僧となつて、滝口入道と同じ仏の道歩み続けました。この世での再会は果たせませんでした。必ずや二人は来世で巡り逢い、揺らぐことのない「真実の愛」を結実させたでしょう。

滝口入道が「老少不定の世の中は、石火の光にことならず」と語った

ように、人の一生は長いようで短いものです。この無常（常に移り変わる儚い世）の中にあつて、今生きている私たちはどのような日々を送れば良いのでしょうか。

蝸牛の角の上

何事をか争ふ

石火の光の中に

此の身を寄す

（白居易「白氏文集」）

（カタツムリの角のように小さな世界で、いったい何を争っているのか。人の一生は短い瞬の中

で生きていくようなものだ）  
カタツムリに何かを近づけると角を引っ込めるように、狭く小さな無常の世の中では、ちよつとしたことでも過剰反応してしまします。今年はい切つて殻から抜け出して、身心を解き放つてみませんか。天を仰げば、悠久無限に広がる大空から、今日も花のような白雪が、ひらひらと舞い降りているかもしれません。（栃木北部教区普濟寺）

## 成道会 厳修

十二月八日（日）



去る十二月八日、有喜苑仏舍利塔において、成道会が厳修されました。



お釈迦様が三十五歳の時の十二月八日に、菩提樹の下で悟りを開いて、仏陀（仏様）となられたことを成道といわれます。この尊い日には、毎年成道会という法要が営まれております。

# 観音菩薩の宗教

(25)

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

## モンゴルの活仏とターラー信仰(そのIII) 続・ターラーナータのターラー信仰

前回に続き、ターラーナータ「黄金の数珠」の述べるターラーが救済する「十六佈」を見てみよう。(第九) 東に正量部(Samitiya)とていいう学派の僧侶たちだけが住む僧院があり、夕方、僧が一人ずつ外に散歩にでかけるたびに死んでしまった。ある夕方、ひとりの見習い僧が散歩に出ると、黒く醜い食人鬼(Nagas)に出会い、牙で頭を捉えて捕まってしまう。大乘仏教には八怖より救い給うターラーがおいでになると思い、その名を呼ぶと(称名)、剣を振り回しながら黒い女神が現れ、食人鬼を脅かした。食人鬼は見習い僧に許しを請い、地中か

のように美しくなった。(第十二) マトゥウラー(Mathura)の林で五百人の声聞の僧が禪定をし、徳を積む生活をしていた。あるときインドラの使いが婆羅門の姿や女性や比丘、羅刹、恐ろしい顔をしたライオンや象や(伝説的動物の)シヤラバ(saraha)などの姿になつてやつてきた。彼らが僧を脅したり賺したりして惑わすと、あるものは記憶を失い、あるものは気が触れて歌つたり踊つたりするようになつた。ある比丘はターラーが救つてくださったことを知っていて、「この林はターラーさまのもの」と書いて木に付けた。すると危機が去って、ターラーへの信心からすべてのもたちは大きな乗り物(大乗)に入った。(第十一) ある婆羅門が貧困に苦しんでいた。あるとき路傍にあつた石造のターラーがストウーパを指さし、「そこを掘りなさい。宝があるでしょ

う」と言った。婆羅門が掘ると、真珠がいっぱいに入った金の壺、さまざまに満ちた銀の壺が出てきて、婆羅門は次の七世代まで貧困の苦しみから脱することができた。また、別の話では、ある貧しい農民がターラーの名を呼ぶと(称名)、葉っぱの着物をまとつた女性が現れて「東に行きなさい」と告げた。彼が東に行き、砂の上で寝ていると鈴の音で目が覚めた。そこには鈴の飾りをつけた緑の馬が蹄で砂を掘っていた。馬はずぐにどこかに行つてしまった。彼が馬の掘つた跡を掘ると、最初に銀の屏が、次に金の屏が、次に水晶の屏が、次に瑠璃の屏などの宝の屏が現れて順次に開いていった。彼は地底の国に降りて行き、龍(Nagas)や阿修羅(Asura)の主となり、快樂を享受した。ある日、彼が穴から地上の自分の国に戻ると、三代の国王がこの世を去っていた。

(第十三) 親族が多くいて、富が豊かな婆羅門がいた。あるとき、ペストが流行り彼の子供や妻、兄弟、義理の兄弟、母方の叔母や他の親族もみな死んでしまった。傷心のあまり彼はヴァナーラナシー(Vanasi)に行つた。そこで彼は仏教の在家信者が行うターラーの大祭を訪ね、ターラーの功德を聞いた。彼は手にいっぱいの花を置き、ターラーを拜んだ。彼が帰宅するとジャヤチャンドラ(Dayachandra)王の姫の婿になることが決まり、その地の君主になった。彼はターラーのための百八の寺院を建立し、そのすべてでターラーの祭礼を制定した。(第十四) アヨーディヤ(Ayodhya)国に大きな富を持つ居士がいた。あるときその国の王が何らかの理由で居士のことを快く思わなくなり批判を始めた。それに対して居士は王の家来たちをそ

(Thahud)まで連れ去つて行つた。他日、居士がチャンパールナ(Camparna)国まで行くと、アヨーディヤー国王は四人の屈強な男を送つて居士を縛つてアヨーディヤーまで連行した。居士がターラーのことを思い出して祈ると、彼が乗つた敷居は黄金となり、入れられた牢屋には真珠の環路の雨が降つた。彼が隙間に処せられそうになると隙の柱は花と果実で彩られたマンガローの木になった。国王たちは賛嘆して「この者は徳を授かつている。どうして処刑などしようか」と述べ、彼を王の大

臣に任命した。(第十五) バンガラ(Bahigala)国のある優婆塞が野外に出かけ、途中で夜叉(Yaksas)の社を見た。彼がその中に足を踏み入れると夜叉は怒つた。夜になると彼が休んでいる自宅に向かって二十一の燃え上がる稲妻が空から飛んできた。このとき彼が聖ターラーを思うと、稲妻の炎はすべて花

となり、優婆塞自身とその子供たちや妻や財産はまったく傷がなかった。(第十六) ある居士が品物を携えて他の国へ行つた。彼は国王から土地をもらいたいと思つて、彼は自分の財産を友達に預け、大きな船に乗つて海に出た。彼は何年ものあいだ海上の島々を旅したが、どんな富も得られなかった。とうとう船は風に押し流され、運良くマラカ(Malaka)の島に到着した。その島には珊瑚や白檀があつたので、彼は多くを取つて船に積んで島を離れた。旅が終わりに近づいた頃、魚族の怪物であるマツチ(Machin)の鼻先で穴を開けられ、船が壊れてしまった。彼は木の板にかまつた波間を流され、インドに到着した。彼が(財産を預けた)友達のことを尋ねると、その友達も旅に出て虎に喰われてしまったことを知つた。悲しみに包まれた。この



ザナバザル作の白ターラー坐像(Sitatārā)。青銅・金箔。右手は与願印、左手は仏教への帰依を表す帰依印(saranagamana mudrā)を示す。ザナバザル美術館蔵(The Eminent Mongolian Sculptor - G. Zanabazar, Ulanbator, 1982)

とき(他の)友達に促され、ターラーに祈つた。するとターラーが夢に現れて「シンドウ(インダス)河の川岸に行きなさい。あなたの願いは叶う」と告げた。彼がそうするとシンドウ河の中から彼が船に積んで海に消えた財宝がすべて見つかった。次にかつての友達の土地に行つて穴を掘ると、預けておいた財産が出てきた。彼が自分の国に帰り、国王に白い白檀の木の幹を献上すると、国王は彼

に素晴らしい五つの街を下賜した。以上がターラーナータの伝えたターラー菩薩の「十六佈」である。これらを見ると、衆生の直面した困難や恐怖に對し、ターラー菩薩が殺生をせず救済することと看取できる。例えば第一佈や第六佈では、敵兵や羅刹は追い返されるのみである。不殺生は五戒の筆頭で、仏教者の守るべき第一の徳目とされる。日本への蒙古

襲来の際し、高僧の敬尊が石清水八幡宮で一東風をもつて兵船を本国に吹き送り、来人をそこなわずして乗るところの船をば焼き失はせたまへ(松尾剛次『忍性』慈悲二過ギタ『ミネルヴァ書房、二〇〇四年)と敵国退散の祈禱をしたのもこれに通底する。敵味方ともに救済する仏教の慈悲である。次回もまたターラー菩薩の功德について考察したい。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙「冬の草花」

八王子市 栢谷玲子 様

タマアジサイ



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

八十四段

思い上がるな

思い上がるとは、出世や成功の経験などから、自分の実力を勘違いしてしまい、自分自身が驕り高ぶっていること、傲慢なことがわからなくなっている状態です。どんな時でも初心を忘れずいたいものです。

高尾山 季節散歩

暦の言葉

「七十二候」

雉始雊

「きじはじめてなく」

一月十五日〜一月十九日頃
雉の雄が求愛のため、「ケーン、ケーン」という甲高い鳴き声で鳴く頃という意味です。
雉は日本の国鳥です。肉は食用で羽も美しいため、古くから日本人の生活に根付き、桃太郎のお供の一匹としても有名です。

今月の風物詩

お雑煮

お雑煮はお正月に特に多く食される汁物で、餅と様々な材料を入れます。
地域ごとに料理法に違いがあり、同じ餅でも東日本は角餅、西日本では丸餅が主流です。
その他、付け合わせの材料は、地域の特産品を使用する場合があります。



平成十九年(2007年)に撮影された初の百回満行者を祝う会の様子

健康登山者投稿作品 思い出の一枚

八王子市 太田 政則

先日、高尾山関係の写真を整理していましたら、貴重な一枚を見つけました。それは高尾山健康登山百回満行者第一号である、石橋照久様の満行祝賀会の記念写真です。
当時はまだ少人数で春夏秋冬、下から汗をかきかき登ってくる同志でしたので、寄り合いという懇親会を良く行い親交を深めておりました。
現在では百回満行された方が大勢いらっしゃいますが、百回満行された後は、御来山なさる方が少なくなるので、寂しい限りです。

オリンピック本番に向けて 三宅義信さん来山



御護摩札を持って大山御貫首と撮影



菅谷執事長と面会された

昨年の十一月二十五日、ウエイトリフティング(重量上げ)の競技で東京オリンピック(一九六四)、メキシコオリンピック(一九六八)を連覇された三宅義信さんが、紅葉の高尾山に来山されました。
三宅さんは現在、NPO法人「ゴールドメダリストを育てる会」の理事長を務められております。御護摩供修行に参列された際には、再び東京の地で行われるオリンピックにおいて、日本の選手達が活躍できますようにと祈念して、御礼の杉苗奉納をされました。
三宅さんは大山御貫首と菅谷執事長にそれぞれ面会されて、目前に迫った本番に向けて、しっかりと選手たちのサポートを続けていくとお話されておりました。

天狗面被い法要厳修

十二月八日(日)



天狗面に一年の交通安全を祈る

十二月八日、JR高尾駅において、旅客安全、輸送安全、交通安全を祈る「天狗面被い法要」が行われました。
法要に先立ち、薬王院や高尾登山電鉄、公益社団法人八王子観光コンベンション協会の職員により、一年の汚れを落とすため天狗面の清掃が行われました。
天狗像作者の大成浩先生も駆けつけて、清掃に参加され、法要では参列の皆と共に交通安全を祈念されました。
天狗像は昭和五十三年十月に完成し、高さ二、四メートル、巾十八メートル、重さ十八トンあり、山梨県産の白御影石を使用しております。

# 高尾山年代記

## 歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

1

### 一世 俊源1 高尾山中興の縁起(上)

現在では三十二世を数える高尾山歴代山主の系譜をたどると、その初代には山城国(京都府南近)醍醐寺から米山した俊源大徳の名があります。

俊源による中興開山は永和元年(一二七五)とも翌二年ともされますが、その同時代の史料は残念ながら伝来していません。史料によつて高尾山の動静が裏付けられるのは、それから約二百年の後、一六世紀の半ば以降になります。この連載では、歴代山主の事跡を追いつながら、中興開山からしばらくは後世の記録に依拠しつつ、戦国から江戸、幕末維新の混乱を経て、今日に続く高尾山の体制が成立するまでの、その悠久の歴史をたどつてゆきたいと思ひます。

#### 「中興俊源」の記録

俊源の名が記された最も年次の古い史料は、管見のところ天正五年(一五七七)・七年・一八年付とひとまとめにされた八世源実が九世源恵へ授けられた印信(秘法の伝授に關わる証書)に添えられた血脈となる。血脈とは宗祖以来の伝法の系譜を記したもので、師弟の名を連綿と書き連ねていく。そこには「有喜寺開山」として、「俊源僧都」の名が見える。寺の呼称として江戸時代には専ら「薬王院」が使用されてきたのに対し、「有喜寺」という記載はこの時期特有なものなので、血脈の作成時期も印信に近いものと推定される。この血脈では、俊源は



高尾山一世 中興開山の俊源大徳

醍醐寺の俊盛から法流を継いだことになっている。醍醐寺は貞観一六年(八七四)、理源大師聖宝によつて山城国の南東、笠取山上(上醍醐)に創建された。醍醐天皇の御願寺として興隆し、山麓の下醍醐の地には多くの堂塔が建ち、大伽藍が發展した。俊盛は醍醐寺の院家の一つである無量寿院の正嫡として、実在が確認できる人物である。江戸時代に入つた後には、元禄五年(二六九二)の二世堯永から三世賢

俊へ授けられた印信に付された血脈に「薬王院中興法印俊源」の名が見え、附法状に「当院先師俊源松橋の祖俊盛法印印可こうむり」という記載がある。「松橋」とは法流の名称で、無量寿院の開祖元海の別名松橋大僧都に因む。さらに、元禄九年の明細書上には、  
高尾山薬王院  
一、開山 行基菩薩  
永和外乙卯年  
中興開山 俊源  
元禄九丙子年まで

三百一十二年間  
一、御法流醍醐松橋慈心院境内において相續明徳四年血脈に有り  
阿闍梨俊盛より  
と記され、この一七世紀の末には醍醐無量寿院正嫡の俊盛から付法を受けた俊源による中興開山という認識が定着していたことになる。  
さて、ここでは、明徳四年(二三九三)の血脈に相承の記載があるという点が注目される。残念ながらこの明徳の血脈が一体どこにあるのかは不

明であるが、中興の年から二〇年弱という近い年次だけに、もしその実物が確認できれば、高尾山中興伝承に關する有力な裏付けとなることだ。このように、中興俊源に關する記事は後世の記述に拠るよりなく、歴史学の方法論からするとその実態は深い霧の彼方と言ふほかないが、俊源による高尾山中興の事跡は、江戸中期の寛延三年(一七五〇)に作成されたという縁起文を根拠に、今日語られることとなる。実はこの岩に刻まれたという縁起文自体が現存しないのだが、八王子千人同心組頭塩野適斎の『桑都日記』と徳川幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』という二種の史料に収録されていることから、その実在は確実視される。

#### 醍醐寺俊源の来山

それでは、寛延の縁起が高尾山中興開山にまつる俊源の事跡をどう表

現しているかについて取り上げてみたい。原文は漢文だが、ここでは読み下した上、漢字表記は読みやすくあらためる。

後円融帝の五年。震沙門俊源なる者。何処の人なるを知らず。高尾に來遊し以て名嶽となすなり。

後円融天皇の即位から数えて五ヶ年目は永和元年(一二七五)である。沙門とは出家者のこと、すなわち僧侶。俊源という者はどここの出身の人物かは不明だが、高尾山にやつて来て、「名嶽となす」とは修行の地にふさわしい山として認めたという意味だろう。

始め方丈を立て、茅茨を以て経像を庇う。

「方丈」とは主に禅宗寺院の長者・住持の居所のことだが、文字通り一丈(約三メートル)四方と取れば、小さな庵の意味となる。茅・茨で経像や仏像を覆つたということ

なので、応急的にかろうじて雨露をしのげる程度の仮普請をしたということになる。

俊源は京に於いて醍醐俊盛法印に法を受く。遂に今まで。累世その法を繼ぐと言ふ。

俊源が醍醐寺の俊盛から付法を受けたという件については先に説明した通りである。現在に至るまで幾世にもわたり法流を継いだと言ふ。

相伝う、俊源は勇猛精進。よく禱り事を奉ず。その浴所は東澗中にあり。稱して靈泉となす。

言い伝えによると、「精進」とは仏教用語として「一心に仏道を修めつとめること」という意味。また、漢籍には「勇猛に善法を修して悪法を断ずる心の作用」という用例がある。「禱り事」とは祈禱、すなわち護摩などの修法のこと。「浴」は水行と解釈でき

るが、その所は、「澗」とは谷水の意味なので山の東側の谷中にあつたということになる。谷間の水行場と言へば、清滝は江戸中期の開削なので、琵琶滝か蛇滝か、かつて表あつた布流滝も全て該当するが、それ以上は想像にまかせられない。一方「靈泉」と言へば、寛延の縁起よりはしばらく後の成立となる『新編武蔵風土記稿』(二八二・「多磨郡之部」成立)には、俊源が山中で修行の際に水を得た場所として「独鈷水」という井戸を記す。この井戸は寺の西にあつたとされるのだが、高尾山頂を基準にすると東側にはなる。

#### 飯縄大権現の示現

深山の孤独の中で「一心に修行に打ち込む日々が続いたある日のこと。かつて十万枚の護摩を修す。心疲れ仮寝す。夢に人面にして鴟喙。

蒼蛇を冠り。笠服を着。背に焰火を出し。腋に両翼を張り。剣を擁し白狐にまたがる。

かつて、十万枚の護摩修法を終えた俊源は、疲れを感じてそのまま寝入ってしまった。すると、その夢の中に、人の顔をしながらも鳥のようなくちばし(鴟喙)を持ち、頭上に蛇(蒼蛇)を頂いた姿が現れる。「笠」とは「天竺」の「竺」でインドのことを言うが、その地に発した宗教である「仏教」という意味もあるのだ。「笠服」とは法衣の意味。釈迦が着した仏像彫刻に見られるような装束ということになる。背には火炎が吹き上がり、腋の下からは背中に生えた両の翼が見え、剣を握つて白狐にまたがっていたという、それはまさに異形の姿であつた。(つづく)

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

# 高尾山小物語 21

## 大久保長安と千人同心

絵・橋本豊治



高尾山八王子近辺に候間、誰人成共みたり竹木切取候ハ、自前々法度之地候間、八王子へめしつられへき者也

〔高尾山竹木伐採禁止における書状〕  
〔高尾山薬王院文書を紐とく〕村上直編三十一頁

徳川家康は多摩地域の開発及び防衛のため、大久保長安を代官頭に任命し、八王子に代官所を設置しました。

長安は多摩地域の開発のみならず、全国の鉱山管理や各地の検地（田畑の調査）、街道に二里塚を設置する等の交通網の整備に尽力し、「天下の総代官」とも称されました。

高尾山もまた長安と関わりがあり、「高尾山薬王院文書」には長安が高尾山の竹木伐採禁止を命じた書状が残されています。また防衛拠点整備のために、武田家の旧臣を中核とした「八王子千人同心」を組織しました。千人同心は幕府に仕える武士として関ヶ原の戦いや大坂冬の陣、夏の陣に参陣する一方、平時には農業を行う半士半農の存在でした。

お疲れさまの一言聞くと心の度処かほぐれます

# 院内散歩

薬王院の展示物



木版画 『雪の鮎茶屋』  
作・井堂雅夫

## おはなし散歩道

### おばあちゃんの初詣

柏市 木村 研

正月になったのに、おばあちゃんは元気がない。紅葉を見に高尾山に上ったときに、若い登山客とぶつかって転んでから膝の調子が悪くなって、高尾山の薬王院に初詣に行けなかったからだ。一年生のしおりちゃんはおばあちゃんの部屋をのぞいて、「高尾山の初詣やらない」と、いった。

「高尾山の初詣？」  
「おばあちゃんが不思議そうな顔をした。これよ。ほら。」  
しおりちゃんは、背中にかくしていた画用紙をだして、おばあちゃんの前大きく広げた。「わたしが作ったすごろくよ。」  
「すごろく？」  
画用紙には、ひらがなで

「たかおさんのはつもうで」と書いてある。そして画用紙の真ん中には、高尾山の絵が大きく描いてある。

「最初はおばあちゃんよ」しおりちゃんが、手作

「おばあちゃん、ケープルコースよ」  
「おばあちゃん、ケープルコースよ」  
「おばあちゃん、ケープルコースよ」  
「おばあちゃん、ケープルコースよ」

「おばあちゃん、ケープルコースよ」  
「おばあちゃん、ケープルコースよ」  
「おばあちゃん、ケープルコースよ」  
「おばあちゃん、ケープルコースよ」

「お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」  
お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」

「お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」  
お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」

「お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」  
お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」

「お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」  
お父さんが、びっくりしたように聞くと、お母さんが、  
「そうよ。それがおばあちゃんのおぼろげな顔から、と、笑った。  
「一回も休まずにですか？」



イラスト スグート



高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様が祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯繩大権現」とお唱え下さい。

**お護摩修行のおすすめ**  
皆様の諸願成就を祈願する

**郵送御護摩**  
申し込み受付について

当山では、御護摩修行に参加できない方の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、インターネットの「高尾山薬王院公式ホームページ」の御護摩祈禱の御案内からも、直接申し込みをすることが出来ますので、こちらも併せて御案内申し上げます。

また、高尾山報の一月号に同封いたしました、郵便振替「払込取扱票」を利用してのお申し込み頂けますようお願いいたします。

また、高尾山報の一月号に同封いたしました、郵便振替「払込取扱票」を利用してのお申し込み頂けますようお願いいたします。



**—新春大護摩奉修特別時間—**

	元旦 (水)	2・3日 (木)・(金)	4・5日 (土)・(日)	6・7日 (月)・(火)	8日以降 (土曜・平日)	12・13・19日 (日・祝)	26日 (日)
午	0:00						
	1:30						
	3:00						
	4:30	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00
	7:30	7:00					
前	9:00	8:00	8:00			8:00	
	10:00	9:00	9:00	9:00	9:30	9:00	9:00
	11:00	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00
	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00
午	0:00	0:00	0:00	0:30	0:30	0:00	0:30
	1:30	1:00	1:00			1:00	
		2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00
	3:00	3:00	3:30	3:30	3:30	3:30	3:30
	4:30	4:00					

★例年、正月期間中は御護摩受付所において、御護摩の申し込みが集中するので、大変混雑致します。

御護摩修行開始時間直前での申し込みの際には、お札の作成が間に合わない場合、次回修行に入りますようお願いいたします。

あらかじめ御了承の上、御来山下さいませすよう、お願い申し上げます。

新たな年の安寧を祈る  
**正月限定 新春特別祈禱札**



このたび新たに正月期間（二月一日～一月三十一日）の限定で「令和新春特別祈禱札」を授与させて頂きます。

近年は自然災害をはじめとする様々な災厄が頻発する時代でありました。しかしながら、元号が令和に改元されてから初めての正月を迎えるにあたり、薬王院におきましては種々の災いが少なくなるよう、また明るい社会を建設できますようにと、特に御祈願申し上げる次第であります。御信徒の皆様方におかれましては、この機会に是非御来山を頂き、新たな時代の安寧を共に祈り下さいますようお願いいたします。

ご祈禱料は一体三萬円となります。

願意（お願ひ事）は「除災開運」のみと限らせていただきます。

御来山当日でのお申込みも可能ですが、正月期間の御護摩受付所は混雑が予想されるため、事前でのお申し込みも頂けます。また、御信徒様各位の都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に郵送でのお取り扱いもいたしておりますので、ご希望の方は手紙・FAX・メールにてご連絡ください。

■お問い合わせ先  
電話 042-661-1115  
FAX 042-664-1199  
メール shinto@takaosan.or.jp

高尾山の昆虫

アオマダラタマムシ



森の宝石とされるタマムシの仲間が高尾でも多産し、その美しい姿を見つる度にしばしば魅入られます。

大型で一番馴染みの深いヤマトタマムシ、そして稀少種のアオタマムシが比較的多産することが特筆されるでしょう。

その他にクロタマムシや淡いウバタマムシも見られますが、もう一種のタマムシ大型美麗種であるアオマダラタマムシのことが以前から気になっていました。

というのは数年前にタマムシの翅が落ちていたのを見つけ、青緑色の体色と彫刻細工のような上翅には窪んだ四つの黄色い紋が認められ、アオマダラタマムシの特徴を示していたからです。

そして後年、飛翔して来た本種を見つけ、高尾における生息を確認できました。

本種は活動初期には金緑の色彩をしていますが、その後陽光を浴びる毎に青味を増していくようで、活動後期の個体は一段と綺麗になっていると感じます。

また成虫越冬することが知られ、秋に羽化した個体は材の中の蛹室でそのまま新年を迎え、春になるとイヌツゲ等のモチノキ科の樹上とその姿を現わします。

（撮影・文 松島 孝）



令和三年 庚子(かのえね)  
高尾山節分会追難式参加申込の御案内

二月三日(月)

歳男・歳女 修行時間

第一回	午前五時(前日より当山で宿泊)
第二回	午前九時
第三回	午前十時半
第四回	正午
第五回	午後一時半
第六回	午後二時半

尚、各修行時間の三十分前、または、定員になり次第締め切らせて頂き、次の回の修行に入つて頂きますので、ご了承ください。

高尾山恒例の節分会(豆まき式)が、二月三日、身上安全、除災開運、災厄消除、福寿円満等の祈願をこめて開催されます。

御信徒の皆様には、歳男・歳女に参加されますようおすすめいたします。

冥加料(祈禱料)三万円

お問い合わせ 高尾山節分会係  
電話〇四二(六六)一一一五



高尾山火渡り祭

(三月八日 日曜日)

柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

當山では毎年三月第二日曜日に高尾山祈禱殿大広場にて、高尾山に春を招く恒例行事として、高尾山修験道による火渡り祭が、高尾山麓火渡り本尊ご寶前において盛大に執り行われます。

火渡り祭とは、高尾山主大導師のもと、全国各地の靈山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈禱法要であります。

この勝行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて使用される、御本尊・飯縄大権現様の功德を顕す御壇木のご志納を一本二万円にて募っております。

ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信授を賜りますよう、謹んで御壇木のご志納をお願いを申し上げます。尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院境内に一年間掲示させていただきます。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒課までお問い合わせ下さい。

電話 〇四二六六一二二五

大本山 高尾山 薬王院 信徒課

祈大願成就 身体健全

高尾 登



お知らせ

高尾山では、御壇木御志納の申し込みを、お電話・ファックス等で受付けております。

高尾山報の二月号に同封いたしました、郵便振替「払込取扱票」を利用してもお申し込み頂けますよう便宜を図りましたので、よろしくお願ひ申し上げます。

「払込取扱票」でお申し込みを頂く際に、願意(お願ひ事)が未記入の場合にご連絡がつかない場合(身体健全)とさせて頂きます。

また、火渡り祭の時に名前を読み上げますので、フリガナの記入もお願ひ致します。

尚、「払込取扱票」は、高尾山報助成金の振替にもご利用いただけます。

# 高尾山慶賛会入会のおすすめ

「物で栄えて心で滅ぶ」という言葉は、昨今の世相を端的に表現しているようにうです。

経済発展の代償として、公害、交通禍、その他様々な弊害が生じ、経済的には豊かになりながらも、心は貧しく刺々しくなり、社会全体が人々の「迷いの心」で覆われております。かかる時代こそ、心に「うるおい」を与える存在として信仰心が必要であり、信仰の温かい心を通じて愛情、尊敬、感謝などの心を養い、人間味豊かな社会を建立したいものと念願しております。

高尾山は現在ミシユラン三ツ星を頂き、『心のふるさと祈りのお山』、世界に冠たる高尾の自然」と称され、多くの参拝者が来られています。

こうした恵まれた自然環境の中にある薬王院には、古来より僧侶だけではなく、広く一般からの篤志家に参加して行われる、多くの年中行事が伝承されております。高尾山慶賛会は、こうした各種の行事を奉賛し、以て御本尊を尊信し、その御加護を仰ぎ明るく暖かく、そして豊かな生活を送ることを目的とするものであります。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会を募り、ご加入御協賛を頂き、御本尊様の威神力に浴されますよう念願するものであります。



侍衣装を着た慶賛会の皆様

### お申込・問合せ

年会費 一口五千円

申込方法 お手数ですが「高尾山慶賛会

係」までお問い合わせ下さい。

申込用紙を発送致します。

〒一九三・八六八六

八王子市高尾町二七七

高尾山薬王院「慶賛会事務局」

TEL 〇四二・六六一・二二五

FAX 〇四二・六六四・二九九

### 健康登山の皆様へ

高尾山報投稿の御案内  
御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※ 投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございます。すことを御了承下さい。

### 「高尾山健康登山の証」のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五十万人の方が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースで楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すペーシがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝いとして、精進料理の御接待や健康登山者限定の記念品などと交換もできます。



帳面……………七百円  
スタンプ…百円

### 高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

前橋市	佐々木	好二
熊谷市	江森	静子
茅ヶ崎市	岡本	イネ子
本庄市	福田	一夫
青梅市	加藤	宏盛
みどり市	萩原	一雄
大田区	田中	良典
板橋区	上野	モト子
町田市	伊藤	裕章
高崎市	植杉	晴夫
邑楽郡	大鷲	幸男
さいたま市	神戸	よし子
春日部市	鈴木	きよ子
安中市	萩原	和子
八王子市	梅澤	富士子
八王子市	松村	延子
相模原市	小川	栄子
八王子市	萩原	清次
港区	片山	敏貞
八王子市	田中	邦宏
〃	橋本	哲也
所沢市	三ツ橋	守
秩父郡	井古田	鉄男
足立区	中山	恵司
北区	下田	晴忠
町田市	古山	昌雄
熊谷市	御正第三	
甲州市	機械化組合	
立川市	中村	文雄
青木	徳祐	

朝霞市	台	雲	寺
八王子市	吉田	利江	
加須市	坂本	隆志	
羽生市	田中	慎一	
越谷市	豊嶋	郁津子	
港区	増田	タカ子	
飯能市	泉田	隆子	
千代田区	高橋	キミ子	
邑楽郡	野村	仁一	
さいたま市	日向	久美	
あきる野市	金子	幸一	
北区	代田	正俊	
八王子市	小池	まり子	
前橋市	青木	茂雄	
比企郡	青木	宏	
ふじみ野市	青木	幸子	
長井市	梅津	久幸	
相模原市	佐藤	久	
さいたま市	佐藤	忠雄	
所沢市	水村	裕介	
八王子市	浦野	節郎	
板橋区	河西	和子	
台東区	川俣	良実	
上尾市	森田	和子	
高崎市	澤田	幾衛	
所沢市	仲	亨子	
邑楽郡	八山	國雄	
牛久市	深山	さく	
羽生市	堀越	哲夫	
伊勢崎市	神坂	慶三	
茅ヶ崎市	椎野	佳子	
あきる野市	松村	忠	

熊谷市 妻沼飯縄講  
中野区 小谷野 文夫  
八王子市 佐藤 敏  
本庄市 茂木 幸子  
所沢市 青木 永次  
前橋市 田村 はつ江  
藤岡市 折茂 サトエ  
小山市 中村 宣晴  
台東区 山下 ヒデア子  
高尾山健康登山者一同

訂正とお詫び  
十一月号十三ページ本文の六行目「石井征仁」を「石井征二」と訂正させて頂いたさせていただきます。  
茲に謹んでお詫び申し上げます。

お知らせ  
正月から節分までの期間中は、繁忙期につき、蛇滝及び琵琶滝での滝行の指導は行いません。  
ただし、通常通り個人での滝行を行うことは出来ます。  
また、同期間中は大師堂での御回向や、不動院での御詠歌、月例写経会も実施されませんことを御了承願います。

### 神徳報謝百味飲食供

### 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味の御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日 午前九時(於大本堂)  
御志納金 一口 三千元以上



大般若経を守護する十六善神の図

# 謹賀新年



令和二年  
庚子(かのえね)  
大本山 高尾山

## 春の行事

初詣 迎光祭

新年特別開帳

大護摩供奉修

初甲子(福徳大黒天祭)

一月二十二日(水)

節分会(厄除開運の豆まき)

二月三日(月)

初午(福徳稻荷祭)

二月九日(日)

釈尊涅槃会

二月十五日(土)

火渡り祭

三月八日(日)

滝開き

四月一日(水)

花まつり(仏舎利塔)

四月八日(水)

春季大祭(稚児練行)

四月十九日(日)



干支張子・子

作・中島 俊介 (札幌勤務)

## 迎 春

貫首	大山隆玄
執事長	菅谷秀文
執事	飯沢秀三
法務部付参務	芳澤秀海
法務部長	堀江承豊
法務課長	桑名善光
修験部長	中原秀英
修験次長	戸田令定
教務部長	佐藤秀仁
庶務部長	犬山秀康
庶務課長	藤田健太郎
信徒部長	原田明仁
信徒課長	深田洋平
用度部長	佐藤伸二
用度次長	山本憲佳
用度課長	大山文武
本堂部長	尾形功
高尾山修験道	
交通安全祈禱殿	
蛇滝水行道場	
琵琶滝水行道場	
山内職員一同	
高尾山山報	
編集主任	菅井倫浩
編集室長	渋谷秀芳

### 二月行事日程

一日、七日

聖天秘供(聖天堂)

八日、二十日

弁天様御縁日

四日、十八日

御詠歌勉強会

八日

(十時不動院)

二十一日

飯繩様御縁日

二十二日

神徳報謝百味飲食供

二十二日

(九時大本堂)

月例写経会

二十三日

(十三時山麓不動院)

二十八日

高尾山とんとんむかし

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

高尾山薬王院ホームページ  
<http://www.takaosan.or.jp>

発行所  
東京都八王子市高尾町2177  
大本山  
高尾山薬王院  
郵便番号 193-8686  
電話(042)-661-1115(代)  
FAX(042)-664-1199  
発行人 菅谷 秀文  
編集人 渋谷 秀芳  
印刷 ヒラツカ印刷社  
毎月1回1日発行  
1部50円